

春 分 儀 式

I O S 儀式魔術文書 VE07A



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE VERNAL EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I O S ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模なグループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に秋分点の前後48時間以内に実施すること。2007年の春分点通過は、3月21日(水)09時07分(日本標準時)である。

儀式内容は、創造の無と有、偏在する光と圧搾された光の思想を中核に春分の祝祭を実施する。

1 創造と二つの光

人間とは「何か(הָיָה מָה)」と「何かではないもの(הָיָה כִּלְיָה בְּרִי מָה)」との間に生まれた矛盾する存在である。⁽¹⁾

ベリ・マーという言葉は聖書に現れる。「תּוֹלַדָּה אֶרֶץ עַל כִּלְיָה מָה」(大地は何かではないものに吊り下がっていた。)(『ヨブ記』26:7)

「有(מָה)」と「無(בְּרִי מָה)」との関係は、「無から有を(יָצָא מִן הַיָּם עֵשׂוּ מַיִן)」という言葉で表される。それはラテン語で「無からの創造(Creatio ex nihilo)」と呼ばれる創造の神秘を解釈するヘブル語の言葉だ。この「無(יָצָא)」から「有(עֵשׂוּ)」の創造というプロセスは、実は段階的な因果関係を示すのではなく、「無」と「有」という二つの位相が同時に存在し、存在しないという矛盾した状況を示すものだ。

これは『ゾーハルの書』にある「原空間(מְחִלָּה דְּהִילָּה)」(Z 277a)において意味をもつ。原空間は、「神性の非存在」と同時に「神性の充溢」である。もし、原空間が神性に満たされているなら、神以外の何ものも存在できない。また、神性が全く存在しない空間であるならば、そこにはやはり(被造物は)何ものも存在できない。

イサク・ルーリアはこの矛盾を「収縮(ツィムツム)」の理論のなかに展開した。

ラムハルの解説書においては、「主が意志を発し、森羅万象を創造するため、被造物の存在できる空間(קוֹמָה)を作るために光を収縮させた。空間なくして何者も存在できないからだ。」とある。⁽²⁾

その情景を神話的な語り口で描写すると次のとおり。

原初に創造主は、全空間を「上なる光(オール・エリオン。אֵלֶּיךָ אֵלֶּיךָ)」⁽³⁾で満たしていた。上なる光は、文字通り無限光であり、境界や限界というものはなく、すべての宇宙に充溢していた。そのため創造主のほかには何もなく、主はいかなる影響力を行使することもできず、ひとりだった。⁽⁴⁾

主が万物の創造を意図したとき、最初になすべきことは上なる光に限界を定めることであった。主の光はあまりにも神聖であり、強烈であったため、上なる光の近傍にいかなる存在も許さなかった。そこで主は光の放射力を弱め、境界を定めて、被造物が存在できる空間を生み出し、峻厳と限界の概念を開示した。これがアインソフのツィムツムであり、ある空間からの上なる光の収縮、そして収縮により生まれた空間を上なる光が周回した。

しかし、主がすべての光を消した訳ではない。かの「白き火の上に黒き火で書かれた」とは、限定された光の不在を表現する文言である。ヘブル語の文字は白地の紙のような「白き火」の上に黒墨のような「黒き火」で書かれる。それは白日の陽光のなかに淡い蠟燭の光を見るようなものである。つまり、見える部分は陰画のようなものである。

(1) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley: North Atlantic Books, 2003, p.27

(2) Rabbi Afilo, op. cit. pp.26.

(3) Rabbi Yehuda L. Ashlag, *Ten Luminous Emanations from Rabbi Isaac Luria, Vol.1*, Jerusalem: Research Centre of Kabbalah, 1969, p.56.

(4) この件については『ティクネイ・ゾーハル』57章に、主の全能と内在を表現する「かが空となる場所はない。」という有名な表現がある。その意味についてはポレンノイのラビ・ヤコブ・ヨセフの著作(R. Yaakov Yosef of Polennoye, Ben Porat Yosef, "The Place that was't

The Religious Thought of Hasidism, Text and Commentary, Hoboken: The Michael Scharf Publication Trust of Yeshiva University Press, 1999, p.21.)を参照のこと。

そして、否定存在の光たる上なる光は、被造物の創造される空間の残光を囲い込む。⁽⁵⁾
 従って、ナハマニデスの言うように「主は光を形作り、闇を創造された（イエツィラー・オール・ヴェ・パーラー・コーシェク。אור וצורה יצר והחשיך）。」とも理解できる。すなわち光は主と不可分であり、光は「無からの創造」の対象ではなく、創造以前から存在した。従って、主は闇を創造されたのだ。⁽⁶⁾そして、この闇こそが「黒き火」、つまり、被造物の存在が可能な微かな光の満たされた空間である。

ツィムツムにより造り出された、神の光の存在しない空虚な空間をハラルという。ハラルとは「窪地」の意味であり、その空間に光が欠けていることを示す。
 ハイム・ヴィタルによるルリアの伝書『十光の流出』では、次のように語られる。

「虚の空気（אין אור）、窪地（הארל）は、単一の境界なき光（אין אור）に満たされ、頭もなく、尾もなく、始まりもなく、終わりもなく、万物は単純で滑らかに均衡が取れ、正しく等しくひとつの同じものの親和性のなかにあった。それは終わりのなき光（אין אור）と呼ばれた。・・・主が自らを内にある中間点（נקודת האמצע）に収縮（צמצום）する前に、光を制約（הגדרה）し、主自らを制約（הגדרה）した。光は中間点の周囲に収縮し、窪地、虚の空気、真空が中間点を正確に取り巻いていた。」⁽⁷⁾

最初にわかりにくい単語を解説する。

中間点とは、アインソフが創造を意志した瞬間にアインソフの内部に仮説されたツィムツムのための焦点である。

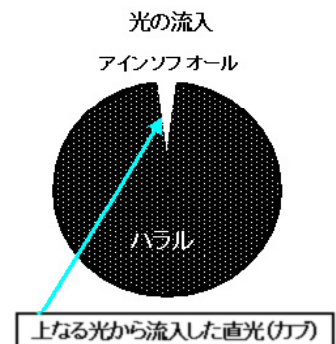
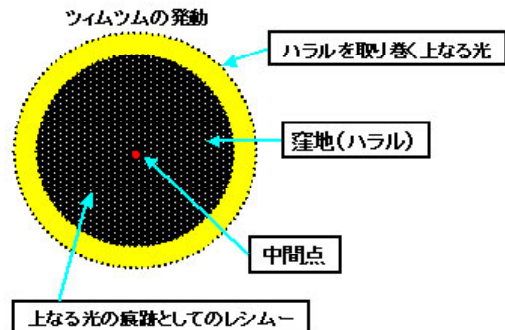
そもそも「上なる光」には、初まりもなければ、終わりもない。従って、その中間点とは字義的には無意味である。しかし、原初の「単純で滑らかな無限定の意志」には、存在の階級、ニュアンス、程度の違いもなければ、大小の差違もない。しかし、ここに「受け取ろうとする意志」が生まれる。そして被造物という成果を受け取るためには、ツィムツムの起点となる中間点を初まりも終わりもない光のなかに設定する必要があった。

ツィムツムにより中間点を意識したアインソフの状況を右図のとおりとする。黄色の領域は無限定の「上なる光」の領域である。中心に示した深紅の点は仮定の「中間点」である。仮にそのイメージを丸いかたちで表現したが、「上なる光」に境界がある訳ではない。ツィムツム以前には、主の光の外側内側も存在しない。最初の創造のはじまる直前の中間点はツィムツムにより、主の光の内側となるはずの仮想点である。⁽⁸⁾

ツィムツムが発動し、主の意志により「上なる光」が制約され、中間点の周りから収縮し、中間点を丸く囲んだ様子が右上図である。このとき中間点はすでに特別な座標ではない。中間点の周りは窪地（ハラル）となり、このハラルの中には「上なる光（オール・エリヨン）」と比較すると、光の痕跡ともいえる粗い光が存在する。それをレシムーという。レシムーとは「痕跡」という意味である。そして、ハラルが生み出した万物の存在可能な場を、被造物は宮殿（マコム）と呼ぶ。

次に発生するプロセスにおいて、ハラルを取り巻くアイン・ソフ・オールから「直光（カブ）」がレシムーのなかに流入する。右に図式化したように薄暗いハラルの外側はすべて「上なる光」で埋め尽くされている。その純粋な光がハラルのなかに、直すぐな光（קב קב）として射し込む。

カブとレシムーの関係は、あたかも靈魂と肉体の関係と言われる。⁽⁹⁾



(5) Rabbi Moses Luzzato, *General Principles of Kabbalah*, Jerusalem : Research Centre of Kabbalah, 1984, p.48.

(6) Rabbi Yehuda L. Ashlag, vol.1, op. cit., pp.43f.

(7) Rabbi Yehuda L. Ashlag, vol.1, op. cit., pp.59-74.

(8) Rabbi Yehuda L. Ashlag, vol.1, op. cit., pp.68f.

(9) Rabbi Afilalo, op. cit., p.27.

この光が同心円上にセフィロトを生成し、砕け、再び流出が開始される。しかし、その経緯を語るには紙数が足りない。

この原初の動的なプロセスが終了したあと、安定した静的な宇宙において、力動的な源泉は容易には見えなくなった。現在の世界を示す『ゾーハルの書』は、次のように語る。

「聖なる源泉は隠されかつ開示されたり。」(Z 64b)

世界創造のとき、聖なる光は最終的には二つに分かれた。片方の「偏在する光」を אור (オール)と呼び、他方の「圧搾された光」を קושיק (コーシェク)と呼ぶ。

いわゆる光とされる「偏在する光」は神性から流出した究極感である。そこに妥協や分割の余地はない。「偏在する光」は絶対の単一性を希求する。この光はそれ自体で完全な単一であり、異者の終わりを探し、万物を自己に引き戻す。従って、この光は被造物を盲目にする。被造物は、この光を理解できない。被造物は、宇宙に偏在し、宇宙を飲み尽くす光たる神を直視できず、把握できない。

一方、闇に比肩される「圧搾された光」は、万物を飲み込むブラックホールである。カバラの世界では、「反対側」(אורן אורן שטרא・アール)として知られている。アールというヘブル語は、同時に「後ろ」、「のちに」、「別の」という意味を有する複雑な単語である。神性のブラックホールは、人間の背後から回復を試み、被造物が流出、進化してきた源泉である被造物の根、そして同時に反対側で、時間的にはのちになる座標で、被造物の到着を待っている。

圧搾された光たるコーシェクは、「闇」または「薄暗がり」と呼ばれる。

何故なら、「偏在する光」と同じ光でありながら、被造物を飲み込み存在を許さない「偏在する光」とは異なり、被造物が見ることができ、生き、個体として存在し得るだけの十分な薄暗さを備えているからだ。

聖書の記述を思い出してもらいたい。モーシェが主と対峙したとき、主は「わが面を見ること能わず。わが面を見て生き長らえるものはない。」と言われた。モーシェは主の背後を拝んだ。(『出エジプト記』33:18-23)

つまり、モーシェは「偏在する光」を直視しようとしたが、この世界においては、直接的ではない反射光、顕現するその影を見ることしかできない。

『ゾーハルの書』においては、「偏在する光はコーシェクを纏う。」(Z 22b)とされる。また、「エロヒムは闇、コーシェクを纏う。」(Z 16b)とされる。

しかし、前述したようにコーシェクも光である。

『パーヒルの書』においては、ラビ・ネフニア・ベン・ハカナの言葉を引いて、「コーシェクも光も異なることはない。」と結論している。⁽¹⁰⁾

さて、この「圧搾された光」(コーシェク)の領域は、オラーム(אוראם)である。オラームは通常、「世界」と訳されるが、その語幹部の אוראם は「秘匿された」、「隠された」、「消え去った」という意味である。

創造された世界は、創造主を秘匿する。そして、オラームの領域では人間は自由意志を発揮できる。そこでは、大きな「われら」ではなく小さな「わたし」でいることができる。オラームの領域においては「絶対性」は異物であり、沈滞を嫌う。シトラ・アールにおいては、神は静的であり、オラームにおいては動的である。オールは、相違を探して除去し、万物を合一させようとする。コーシェクは、相違のなかに合一を探す。オールは、われらはひとつであり、同じだと主張する。コーシェクは、われらはひとつであるが、同じではないと主張する。

そして、神秘の技を心得た者がふたつの領域を見据えて、オールとコーシェクの間に、シトラ・アールの領域とオラームの領域の間に、神秘なる舞踊を演じるとき、ふたつの領域は調和をたもつ。

(10) Aryeh Kaplan, *The Bahir*, York Beach : Samuel Weiser, 1979, p.1.

2 司官の配置

(1) 司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR (P C)、すなわち「先導者」の1名である。

P C は、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い、白のネミスをかぶり、マントやその他の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশヨナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオーン・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体（かれらはアストラル体と呼称）を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間 (Robing Room) において、光の法衣を纏う。

(2) トーラーの宰相の召喚

司官は、マルクト神殿で律法の公爵を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上が「肉の衣を去る」までは、実効上の神（天使を使役する者）として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

3 アストラル神殿の構造

マルクト神殿を使用する。

4 魔術の技法的側面

(1) 聖四文字の呼吸

バルディチェブのラビ・レヴィ・イーチャクの見解によれば、聖四文字「יהוה」の前半の二文字「יה」は「無の性質」を、後半の二文字「וה」は「有の性質」を表す。「有の性質」は、われわれが自然界と認知する存在の階層をあらわす。そして、「無の性質」は、霊的世界と認知する存在の階層をあらわす。従って、物質界において「יה」の意識を獲得すれば、物質を超越することができる。「יה」を詠唱する際は、「ヨー・ヘー」と発声する。瞑想中は、呼吸音ぐらいの高さで囁く。息を吐きつつヨーと詠唱し、息を吸いしつつヘーと詠唱する。その際は、心中にそれぞれの文字を視覚化する。⁽¹¹⁾

今回は、すでに境界を跨いだアストラル・ライトのなかで、「無の性質」を象徴するヨド・ヘーの呼吸と「有の性質」を象徴するヴァウ・ヘーの呼吸を併用し、祭壇の上に「有と無の融合」を現出させる。

(2) 呪歌の構成

今回使用したのは呪文ではなく聖名である。

しかし、シャーマニックな詠唱の形態を取るように変形しており、呪歌として使用される。太古の神官は、聖名を旋律をつけて唱えたのである。それはある目的のために詠唱される歌であった。

霊的領域と物質的領域は同じリアリティを共有しており、ただ、「幻影の帳」（パルガド「פרקלית」）が両者を隔てている（Z 255 b）。

前項の呼吸法と同様に、角笛（ショーファー）の朗々たる響きと詠唱（シャント）は、この幻影の帳を開き霊的領域にアクセスする技術的な鍵となる。

(3) 黎明視

認知神経心理学の研究成果によると、人間の脳は外部の視覚情報が混乱すると脳内に蓄積された様々な視覚像を投影することがある。視覚情報の混乱は良く見えない場合に発生するので、緑内障等の病気で視力が低下しているとき、或いは暗い場所で物をみようとしたとき、水晶球



(11) Gershon Winkler, p.30.

などの不鮮明な像を結ぶものを見ているときに発生しやすい。これらのエラー・パターンは、⁽¹²⁾かなり高い確立で発生する。この視覚情報の混乱による幻視を「シャルル・ボネ諸侯群⁽¹³⁾」と呼ぶ場合もある。

古来、魔術師はこの原理を熟知して、幻視の導入に使用していた。視覚像の混乱は、古代神オーディンのような片目の賢者の伝説、黄昏時が逢魔が時であるとの解説、スペキュラムの利用等に適用された。一方、言語入力 of 混乱による操作には、呪文の反復（単純類似構音の連続による記憶操作⁽¹⁴⁾）、ゲマトリア等の文字の操作などが多用された。

人間の脳、特に伝統的な秘教的訓練の施された人間の脳は巨大な情報のプールである。

上記の技法は、認知神経心理学の説明した脳の認知プロセスを意図的に混乱させることで、意識が把握できない脳の共有情報（個人的、集合的無意識）を利用するために行われた。

今回は、比較的簡単に実践できる視覚像の混乱を利用した黎明視という技法を適用する。

5 身辺の準備

（１）部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。（家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等）、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に快適な椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

部屋を薄暗くする。小さな照明を利用する場合は、背後に置き、その光を直視しないように配置する。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

（２）シナリオ

今回は、シナリオ文書を単純化したので記憶してもらいたい。黎明視の妨げとなるので、テープの録音も不要である。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

神聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

（３）直前の手順

開始する前に手を洗い（儀式的沐浴）、法衣（または身体を締め付けない服装）に着替え、L B R Pを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

(12) グザヴィエ・スロン、『認知神経心理学』、白水社、1995年、39-40頁。

(13) <http://jiten.com/dicmi/docs/k12/17252s.htm>

(14) スロン前掲書、63、64頁。

第2章 儀式

1 神殿への入場

この準備的作業は、光体のレベルではなく、生身の肉体で行う。

参加者は、東に面して座り、目をかすかに開き（いわゆる半眼の状態）にする。視線は足下に落とし、家具などの周囲の状況が明確に像を結ばないようにする。瞼を開く程度を変えて、この焦点を結ばない状態を維持する。気持ちが悪くなった場合は、普通に眼を開いて、もう一度調整する。

半眼のまま、深く呼吸をする。呼吸は肺だけではなく、全身の皮膚を通して行う。一息ごとに、喉や鼻孔のみならず、全身の皮膚から、周囲に満ちている生気が肉体に吸い込まれ、全身の細胞を活性化する。

あなたは光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとボアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたI O Sの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るP Cが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」P Cは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話的形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。アケファロスの姿形をもつ参加者のひとりひとりには、自ら形成した四大の豊灯が寄り添い四色の光を放っている。

P Cは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

P Cは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。

引き続き、小六芒星の追儼儀式及び物見の塔の儀式を行う。

参加者は、その動きを廊室から、おぼろげな円運動による渦の発生として捉える。詳細なP Cの動作を視覚化する必要はない。

4 入場及び宣言

P Cは神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

P Cの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。

兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち、姉妹は左側、北の壁際に立つ。

P Cは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

P C：「I O S の兄弟姉妹たちよ。春分の儀式を開始せん。」

5 律法の宰相の召喚

P C：「七つの封印を光体に刻印せん。」

P Cは聖なる名前を唱えたあと、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

参加者もP Cの動作に倣う。

P C：聖名とともに唱える。「アブリース ススティイー。わが脚を封じる。」

(אֲבִירִים סֻסְתִּיִּי)

全員：「わが脚を封じる。」

全員：「わが心臓を封じる。」

全員：「わが右腕を封じる。」

全員：「わが左腕を封じる。」

全員：「わが首を封じる。」

全員：「わが生命とすべての部分を守護するために。」

全員：「わが天蓋を封じる。」

PCが宣言する。

五界を結ぶは、われなり。」

神殿の東壁の中央に扉が現れた。

(טהרה ה') そは清浄なり。)

アター・バラター
 (אַתָּה אֵל בָּרַךְ אֶתְּךָ 汝がそを創造せり。)
 アター・ヤツアルター
 (אַתָּה יָצַרְתָּ אֶתְּךָ 汝がそを形成せり。)
 アター・ネファクター・ビー
 (אַתָּה נָפַחְתָּ אֶתְּךָ 汝はそを我に吹き寄せる。)
 ヴェ・アター・メシャムラー・ブキルビー
 (וְאַתָּה מְשַׁמֵּר בְּקִרְבִּי また、汝は我がうちにあるそを監視する。)
 ヴェ・アター・アティード・リット・ラー・ム・メフニイー
 (וְאַתָּה לִטַּלְתָּ אֶתְּךָ מִמִּפְנֵי 又、汝はいつかそを我より取上げる。)

全員：「バラフター・ヴェ・ヤツアルター
 (אַתָּה יָצַרְתָּ אֶתְּךָ 創造と形成)」

PCは、東の方向に宝瓶宮のサインを描く。

PC：「ヒー・ネイ・ニー (אֲנִי הֵנָּה われはここに)
 ヒー・ネイ・ニー (אֲנִי הֵנָּה われはここに)
 ヒー・ネイ・アーニー・ヤー (אֲנִי אֶתְּךָ הֵנָּה われはここに、神の息吹の)
 アナ・ホウシーアー (אֲנִי הֵנָּה הוֹשֵׁעַ 加護のあらんことを)

全員：「ヤー・アナ・ホウシーアー
 (אֲנִי הֵנָּה הוֹשֵׁעַ 息吹の加護あらんこと)」

PCはヨド・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

PC：「ヨー」(呼吸)「ヘー」(吸気)「ペーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)
 全員：「ヨー」(呼吸)「ヘー」(吸気)「ペーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

東の壁いっぱい、黄色い照り返しを浴びた雲海がひろがる。
 雲海は下から湧きあがる雲の断片で沸騰するようだ。
 その黄色い雲の渦の中心に、仄かな薄暗い陰が生まれる。
 その陰は人型をつくる。人型の頭部が紫色の光を放つ。
 これはエロヒムの影だ。

PCは、祭壇の南に回り、南の方向に獅子宮のサインを描く。

PC：「アーニー・ボー (אֲנִי בָרַךְ われと名前なきもの)
 アーニー・ボー (אֲנִי בָרַךְ われと名前なきもの)
 エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)

全員：「エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)」

南の壁いっぱい、紅蓮の炎が燃えさかる。
 爆発的な溶岩の噴出、燃え上がる硫黄の噴煙を炎の陰に垣間見る。
 その炎の壁のただなかに、巨大なたてがみのある生き物が見える。
 強靱な爪のある筋肉の束が炎を掻き分ける。
 それは獅子のすがたをもつ炎である。

PCは、祭壇の西に回り、西の方向に天蠟宮のサインを描く。

PC：「アーニー・ボー (אֲנִי בָרַךְ われと名前なきもの)
 アーニー・ボー (אֲנִי בָרַךְ われと名前なきもの)
 ホウシーアナ (אֲנִי הוֹשֵׁעַ われを助けよ)

全員：「ホウシーアナ (אֲנִי הוֹשֵׁעַ われを助けよ)」

PCはヴァウ・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。
PC：「ヴァウ」（呼气）「ヘー」（吸気）「マー」（有の性質を強く意識する。）
全員：「ヴァウ」（呼气）「ヘー」（吸気）「マー」（有の性質を強く意識する。）

西の壁いっぱい、ブルー・オーシャンがひろがる。
それは砂浜近くの明るい海水ではなく、海底の伺えない深海の青黒い海原である。
小島ほどもある巨大なうねりが押し寄せてくる。
その大うねりの海水の表面に、途方もなく巨大な翼ある生き物の影が映る。
それは鷲の翼のようである。

PCは、祭壇の北に回り、北の方向に金牛宮のサインを描く。

PC：「アーニー・ボー (אָנִי בּוֹר われと名前なきもの)
アーニー・ボー (אָנִי בּוֹר われと名前なきもの)
エレッツ・カーナーニー (אֶרֶץ כַּנְעַן カナンの地よ)」

全員：「エレッツ・カーナーニー (אֶרֶץ כַּנְעַן カナンの地よ)」

北の壁いっぱい、乾いた大地がひろがっている。
地平線の彼方には、雲をまといつかせた山脈が遠望できる。
彼方の雪の峰から手前にかけては、なだらかな丘陵地帯になっており、
その丘の上に角のある生き物の影が射す。
生き物は牡牛のように見える。

PCは、祭壇の東に回り、東面する。全員が東面する。
PCは儀式用の長大な角笛を取り出した。

PC：「コル・アナカー・ヴェ・テキアー (קוֹל אֲנָכָה וְתִקְיָאָה)」
PCは角笛を口にあて、一息で続く長々音（テキアー）を
鳴り響かせる。これは抵抗の音、嘆息の響き（コル・
アナカー）である。
PC：「_____」

PC：「コル・ハバラー・ヴェ・シュヴァリム (קוֹל הַבְּרָה וְשִׁבְרִים)」
PCは角笛を口にあて、三つの短音（シュヴァリム）を
鳴り響かせる。これは抵抗の音を粉碎する音節の響き
（コル・ハバラー）と呼ばれる。
PC：「- - -」

PC：「コル・テルアー (קוֹל תְּרוּעָה)」
PCは角笛を口にあて、九つの短音を連続して吹鳴する
テルアーを鳴り響かせる。これは角笛の司牧の響きと呼ばれる。
PC：「- - - - -」

角笛の響きとともに四方位の壁が融解した。矩形の神殿の広間が半球状の空間に変貌した。

PCが高らかに唄い始める。
PC：「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー・シャーディー (לִי יֵשׁ אַחִיָּה קְבוּץ שְׂדֵי 汝が導きにわが望みを主よ。)
キー・ビー・ティー・シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー
(לִי יֵשׁ אַחִיָּה קְבוּץ שְׂדֵי 我が望みを主の導かれるままに。)
シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー
(לִי יֵשׁ אַחִיָּה קְבוּץ 主の導きに我が望みを。)」

PC：「サティーム・ヴェ・グー・リアー (סַתִּימ וְגִוִּלִּיָּה)」
全員：「隠され開示されたり。」



聖化した四方位の風により、神殿の広間において完全に無垢の身となったあなたは、春分の秘儀にあずかる。

P C は、神殿の東に行き西を向いて言う。
「この宮居は、光と闇の至聖処なり。
今、宮居の上に春分の太陽があり、
闇は光と均衡せんとしている。
われは律法の宰相として、
春分の執行を宣言する。」

7 春分の主祭

P C は、至聖処の東側から中央を向いて言う。

P C : 「祭壇に宇宙の軸を召喚せん。
I a H a V a H a (ヤアー・ハアー・ヴァー・ハアー)
H e V e H e I e (ヘイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ)
V o H o I o H o (ヴォー・ホー・イヨー・ホー)
H I H V (ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ) 」

P C が宣言する。

P C : 「大いなる周行をもって、祭壇に集中せん。」

祭壇を軸として、3 度周行する。

P C : 「神秘なる周行は完成し、昼と夜は均衡した。春分は到来せり。」

P C は、祭壇の東に立ち、西に向かってハーボクラテスのサインを行う。

P C : 「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

P C は、祭壇の西に廻り、東に向かってホルスのサインを行う。

P C : 「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

P C : 「パスワードは交換された。」

全員が祭壇を取り囲む。

P C : 「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。
無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、
そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに祭壇を包み込む。

手を放すことなく次を唱える。

全員 : 「主よ。われらは自らを捧げん。
わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。
汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員、東を向く。

全員 : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！
光と闇の主よ。」

8 諸天使の出立

P C は祭壇の北に行き、南を向く。

P C : 「律法の宰相の加護に感謝する。
霊の虚の場所に戻りたまえ。」

P C は再度、祭壇の西に行き、東を向く。

P C : 「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。
ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー (יְדוּהָה)
万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。
ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー (יְשׁוּהָה)
戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。
光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

P C : 「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。」

主の聖霊は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

9 地上への帰還

PC：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。されば、地上に帰還せん。」

PCは《ヴェールを閉じる》サインを行う。

PC：「イエヘシュアーとイエホヴァシャーの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

PC：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。（特別な手順は必要ない。）静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE
AEQUINOCTIO VERO A

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MCMXCX

春分儀式 VE 0 7 A

Copyrights © All rights reserved I O S 2007

2007年3月19日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。